

社 会

(2026年度)

《注 意》

1. 試験開始の合図があるまでは、問題用紙を開けてはいけません。
2. 問題用紙は10ページまであります。解答用紙は2枚です。試験開始の合図があったら、まず、問題用紙、解答用紙がそろっているかを確認、次に、すべての解答用紙に「受験番号」「氏名」「整理番号」を記入しなさい。
3. 試験中は、試験監督^{かんとく}の指示に従いなさい。
4. 試験中に、まわりを見るなどの行動をすると、不正行為^{こうい}とみなすことがあります。疑われるような行動をとってはいけません。
5. 試験終了^{しゅうりょう}の合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。
6. 試験終了後、試験監督の指示に従い、解答用紙は書いてある方を表にして、上から、(その1)(その2)の順に重ね、全体を一緒^{いっしょ}に裏返して置きなさい。
7. 試験終了後、書きこみを行うと不正行為とみなします。

次の文章をよく読んで、5ページから10ページの問いに答えなさい。

ア. 日本は国土の約三分の二が森林でおおわれた国です。 私たちにとって、森林はとても身近な存在です。君も、森林から生み出されたものを使っているはずです。今座っている椅子も机も木からできたものです。この問題用紙も木からできています。自宅に木製のものがまったくないという人はまずいないでしょう。私たちにとって、木は生活の道具として欠かせない存在です。

イ. 文明の発展にしたがって、人びとの暮らしは大きく変わりましたが、木を利用した建物や道具は常に身近にありました。 それだけでなく、木は燃料としても使われました。古墳には人や動物、建物などをかたどった(あ)が数多く並べられましたが、それらを焼くために伐採された木の量は大変なものだったことでしょう。

天皇が大きな権力を持ち、都をつくるようになる、それまでにない大きな建物があらわれました。694年に、持統天皇は現在の奈良県にある(い)を都に定めました。そのなかには天皇の住むところと、役人など都の住民の家がありました。朝廷がつくらせた建物や大きなお寺はもちろん、人びとの家のために、近くの森林から大量の木が伐採されました。しかしそれだけでは足りず、古い建物を解体して、新しい建物の材料に再利用することもありました。ウ. それでも木材が不足したため、屋根に木の皮や茅(ススキなどの植物)を使うなど、さまざまな工夫がなされました。

平安時代に都の周辺の森林がほとんど切られると、都に住む貴族たちは地方の森林にも手を伸ばし、そこから木材を強引に手に入れようとしていました。これに対して、都から地方に送られた役人のなかには、地元で使う木材が足りなくなるとして反対する人もいました。その後、エ. 鎌倉時代に入りしばらくすると、木材が商品として活発に売買されるようになったこともあり、貴族たちは木材を各地から買い集めるようになりました。

戦国時代には城づくりなどを通じて土木技術が高まりました。江戸時代に入ると、こうした技術を使って新田開発が活発に行われ、人口増加を支えました。肥料となる草や葉をとるための草山も、さらに広い面積が必要となり、森林が伐採されました。草山は深く根を張る木が少ないため水を蓄える力が強くありません。そのため土砂災害が増えてしまいました。人びとが生活のために木を切ったことで、かえって暮らしにくくなってしまったのです。

そこで、江戸幕府や藩は森林の利用を制限しはじめます。はじめのころには木の伐採を禁じる留山という命令が出され、後には時期ごとに少しずつ伐採も行われました。また、飢饉のときには人びとに森林を開放して食料を確保させる御救山という取り組みも行われ、幕府や藩の下で森林の利用と保護のバランスが回復しました。

それだけでなく、幕府は土砂災害の被害を抑えるための取り組みを行いました。オ. たと

えば徳川綱吉は、近畿地方に土砂災害を防ぐための命令を出しました。幕府は土砂留め奉行とよばれる役人を置き、各地の村をまわって土砂災害防止のための点検や工事をさせました。

また、幕府や藩は森林をめぐる村同士の対立にも関わりました。たとえば現在の長野県と新潟県の境目にある二つの村は、お互いの村の間にある山の利用や境界などをめぐって争いましたが、村同士の話し合いでは決着がつきませんでした。カ. そこで二つの村がそれぞれ自分の村を治める藩に訴えた結果、藩同士の話し合いが行われました。しかしそれでも決着がつかず、最終的には藩よりも力のある幕府に訴えが持ち込まれました。幕府は新潟県側の村の主張を認め、先に手を出した長野県側の百姓を牢屋に入れるように命じました。村の人びとにとって山の利用は、はるばる江戸まで訴えにいくほどに大切な問題だったので

明治時代に入ると、森林との関わり方がそれまでとは大きく変わりました。その原因のひとつが、土地の所有権という新しい考え方です。これは自分の土地について、どう使用して、どう利益を得るか、誰に売るかはすべて所有者の自由とするものです。江戸時代まで、森林は共同で使う場所でしたが、原則として所有者だけが自由に使えることになりました。その一方、政府は収入を安定させるため、(う)という政策により土地の価格に応じた税金を所有者に課しました。

所有権という考え方にもとづいて、森林が私有地や国有地などに整理されていくと、それまでの共同での森林利用のあり方は大きく変わり、混乱を生みました。所有者ではない人びとは森林を自由に利用することができなくなったためです。静岡県の沼津にある愛鷹山は、江戸時代には地域の人びとが共同で利用していましたが、明治時代に国有化され、それまでのようには使えなくなってしまいました。これに対して地元の議員だった江原素六らが中心となって政府に働きかけ、地域住民が元通りに使えるようにさせました。

混乱がありながらも、人びとは少しずつ所有権の考え方を受け入れました。産業の発展にともない多くの木材が必要とされるようになったこともあり、自分が持つ森林を活用してより多くの利益を得ようとするようになりました。こうして始まったのが近代的な林業です。

林業は長い時間をかけて利益を得る産業です。木を切ることと、切った場所に植林をすることをくりかえします。キ. 伐採した木を運び出す方法として、明治時代まではいかだを組んで川に流していく方法が一般的でした。しかし、時代を経て河川の姿が変わると、そうした仕組みはみられなくなりました。

林業は戦後もしばらくの間、日本の主要な産業のひとつでしたが、次第におとろえていきました。その理由としてもっとも大きいと考えられるのが、外国産材の輸入増加を背景とするク. 木材価格の低迷です。ケ. 高度経済成長の時代、住宅を建設するため国内での木材の消費が増え続けました。ところが、1964年に木材の輸入が自由化されたため国産材よりも価

格の安い外国産材との競争となり、国産材の消費量は次第に減っていきました。その後もコ. 東南アジアなどから多くの木材が輸入され続けました。

木材価格が下がると、木を育てても利益がみこめないため、土地所有者は植林や手入れを行わなくなりました。税金を取られるだけの森林を安くても売りたいと考える人もあらわれたため、森林がその土地とはまったく無関係の人や、林業以外の目的で利用したいと考える人の手に渡っていくこともありました。こうして日本の森林は荒れていったのです。

しかしそうした状況も近年、変化がみられます。図1にあるように、2002年の18.8%を底として木材自給率は上昇を続け、2020年には41.8%となりました。これにはさまざまな要因があります。まず、外国産材が値上がりし、逆に国産材が値下がりしたことで、国産材の利用が広がりました。またそれまでにはないさまざまな用途での利用が拡大したことも、自給率を向上させました。たとえばサ. 燃料用の木材（木材チップ）はそうした用途のひとつです。

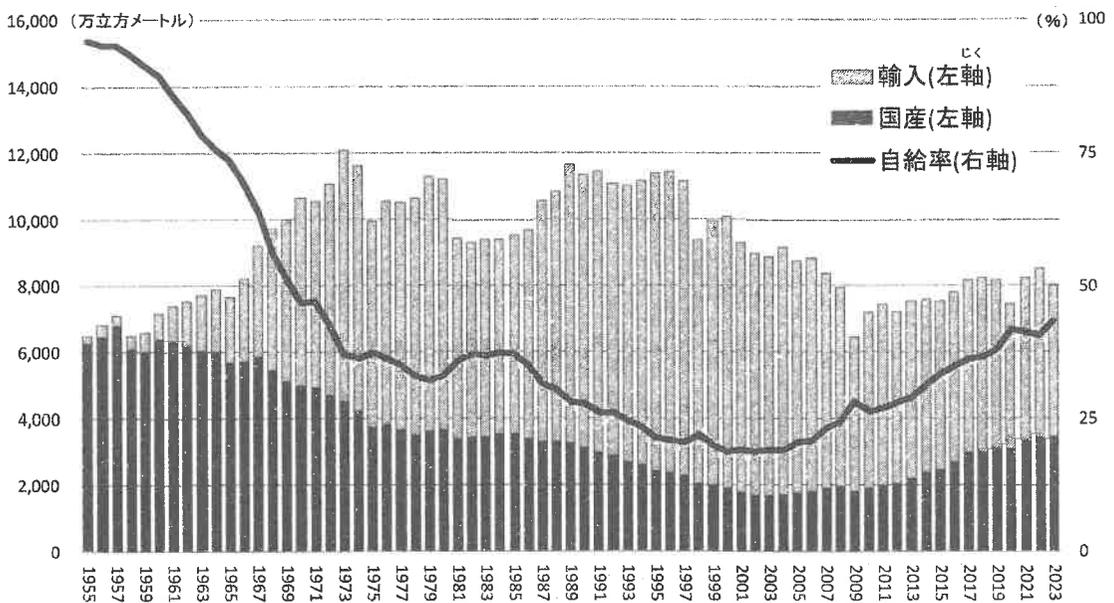


図1 木材の消費量と自給率の移り変わり
(農林水産省のデータより作成)

このように、人びとはさまざまな形で森林を利用してきました。森林は木材だけでなく、燃料や肥料、食料なども得られる場所として、生活を支えてきました。江戸時代には、開発で増えた土砂災害を防ぐために、幕府や藩による森林保護が進みました。明治時代には、金銭的利益を求める林業も盛んになりました。

さらに近年では、新たな森林の価値も見いだされてきています。豊かな生態系や美しい景観、人びとに与えるリラックス効果などです。こうした森林の多様な価値が認められるよう

になったことで、利用と保護のバランスをとるのは今までよりも難しくなりました。

日本における事例をみてみましょう。1972年に(え)で開催されたオリンピックで、恵庭岳^{えにだけ}はスキー競技の会場となりました。もともと自然の森林が広がっていた恵庭岳ですが、競技のためにそれらの一部が伐採されました。大会終了^{しゅうりょう}後に植林をしましたが、もともと生えていた木とは種類の異なる木を植えてしまったため、大きな問題となりました。現在の恵庭岳には、一目見て木の色が違うことがわかる部分があります。植林により木の量は回復しましたが、森林の姿は変わってしまったのです。これに対して、人びとは抗議^{こうぎ}の声をあげ続けています。

東京^{とうきょう}の再開発でも、街路樹や公園といった都市の「森林」の伐採が問題となることがあります。古い建物が集まる地区をまとめて新しくする再開発では、木々を伐採することで、大きな建物をつくる場所を確保します。こうした伐採については、土地の所有者が認めていても、人びとが反発することが少なくありません。近年では、人びとの反発を抑えるため、大きなビルを建設するような再開発を行うときに、ビルの周辺に木を植えたり緑地を設けることも増えてきました。しかしそれでも、慣れ親しんだ木々が消えることに抵抗^{ていこう}を覚える人は多く、大きな反対運動が起こることもあります。

明治時代以降、森林を利用するときには、所有者だけが自由に使えるという原則が優先されてきました。しかし、もはやそれだけではうまくいかない時代に入っています。シ. 森林は土地所有者や林業従事者だけに関わるのではなく、多くの人びとにとって今なお大切な役割を果たしています。森林とどう向き合うかは、私たちにあって避けては通れない課題なのです。

問1 文中の空らん(あ)～(え)にあてはまる語句を答えなさい。ただし、(い)には都の名前、(え)には都市名が入ります。

問2 下線部アについて。右の図2の①と②にあてはまる土地利用をあ～えからそれぞれ1つ選び、記号で答えなさい。

- あ 農業用地
- い 工業用地
- う 商業用地
- え 住宅用地

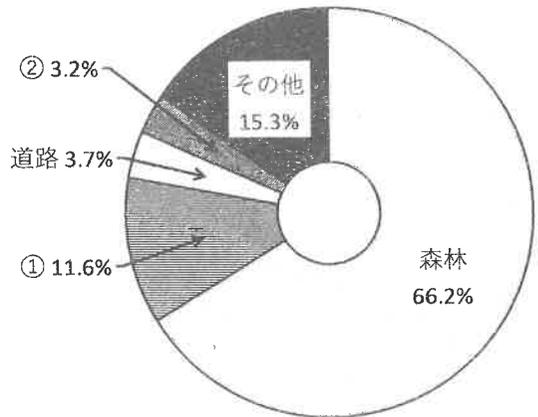


図2 日本の国土の土地利用の割合 (2023年)
(国土交通省のデータより作成)

問3 下線部イについて。^{やよい}弥生時代に存在した建物や道具として適当でないものを下の図3のあ～おから1つ選び、記号で答えなさい。

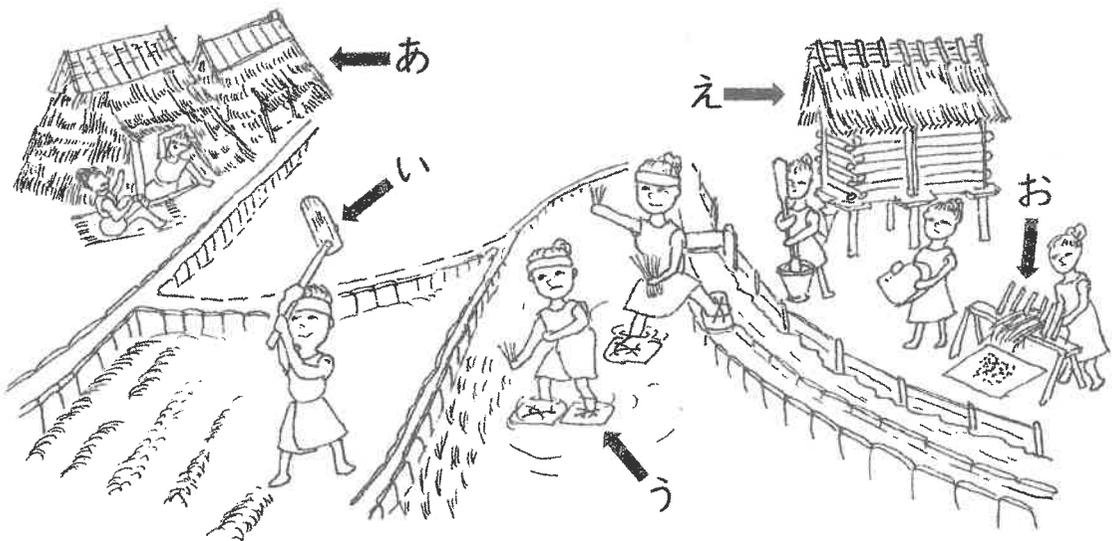


図3 弥生時代の1年間の農作業の様子

問4 下線部ウについて。

- (1) 奈良時代の朝廷は、都に住む貴族や豊かな住民の家の屋根について、板や茅ではなく、外国から作り方が伝わった瓦かわらでつくるよう命令しました。なぜ朝廷は都にそうした命令を出したのでしょうか。瓦屋根のある都の風景にどのような意味があるかを考えて説明しなさい。
- (2) 明治時代以降、地方の村でも茅ぶきの屋根が瓦に代わったり、トタン（金属の板）をかぶせたりするようになりました。なぜ茅ぶきの屋根を保つのが難しくなったのでしょうか。下の図4を参考にして説明しなさい。

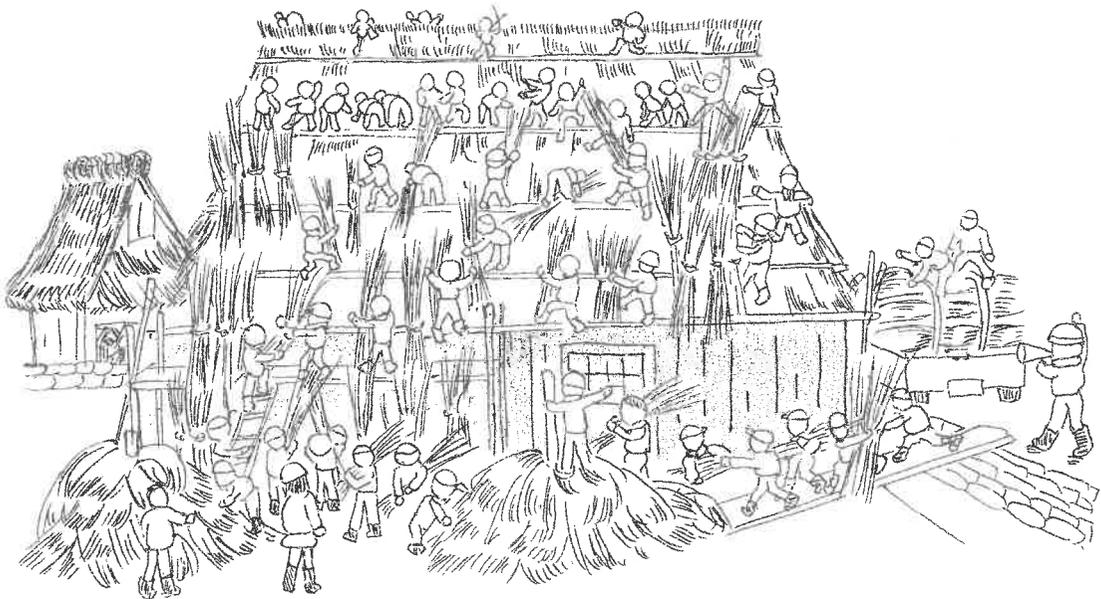


図4 茅ぶき屋根のふき替えの様子

問5 下線部エについて。現在の^{きょうと}京都府の、ある神社の建設に関わる史料には、担当者が買いつけた木材について、下の表1のような説明がありました。

表1 買いつけた木材

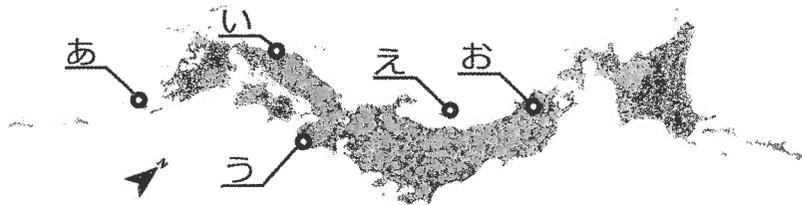
木材の説明	本数
はば 幅8寸×厚さ9寸の木材	27本
幅7寸×厚さ9寸の木材	6本
いわみ 石見産の木材	70本
くまの 熊野産の木材	4本

※1寸=約3cm

この表では価格は省略した

(田村憲美「文永九年山城国高神社造営流記について」より作成)

(1) 石見と熊野の場所を下の地図1のあ～おから1つずつ選び、記号で答えなさい。また、それぞれについて説明した文章をA～Eから1つずつ選び、記号で答えなさい。



地図1

- A 戦国時代から開発された銀山があり、そこでとれた銀は中国から^{きいと}生糸を買うときの^{しはら}支払いに使われた。
- B 東アジアで最大のブナの原生林が残り、世界のほかのブナ林よりも多様性に富んでいる。
- C 山や森などのなかにある寺院や神社とそれらをつなぐ道があり、貴族が盛んにお参りした。
- D 雨が多く、中心部に高い山がそびえることから、^{あねったい}亜熱帯から高山帯に生えるさまざまな植物がみられる。
- E 戦国時代から開発された金山があり、江戸幕府の管理の下で、質の高い金を大量に生産した。

(2) 表1をみると、すべての木材に地名が書かれたわけではないことがわかります。一部の木材についてのみ地名が書かれた理由はなぜだと考えられますか。説明しなさい。

問6 下線部オについて。このとき土砂災害を防ぐために出された命令は、下のようなものでした。一方、この命令には江戸幕府や藩としてはあまり実施したくない面もありました。どのような影響が出るからでしょうか。2つの項目を参考にして説明しなさい。

一、幕府や藩などが治める山々で、農民が肥料にするために木草の根をいつも掘り取るので、風雨のときに川沿いに土砂が流れ出て水がたまってしまふ。そこで今後は、木草の根を掘り取ることを禁止する。

一、幕府や藩などが治める川沿いの新旧の田畑は廃棄し、その跡に木苗や竹木などを植えつけなさい。

(『御触書寛保集成』より作成)

問7 下線部力について。この争いでは、藩同士の話し合いは解決につながらず、江戸幕府のもとで最終的な決着がつかしました。その背景としては権力の問題だけでなく、藩と村、幕府と村の関わり方の違いがあったと考えられます。この争いに対する藩と幕府の関わり方の違いを説明した文章になるように、下の空らん①と②をうめなさい。

藩同士の話し合いは、それぞれの藩が(①)のために交渉したので解決させることができなかつた。一方、幕府は(②)の立場から関わつたので最終的な決着がついた。

問8 下線部キについて。いかだを組んで木を運んでいた地域として木曾川があげられます。しかし大正時代以降の木曾川では、下流にある名古屋などの大都市の人口が増え生活が変化したことにより、それまでのように木を運ぶことができなくなりました。なぜ運ぶことができなくなつたのでしょうか。川や水の利用の仕方の変化を考えて説明しなさい。

問9 下線部クについて。木材価格とよばれるものにはさまざまな種類があります。森の木が建物に使うような木材になるまでにはいくつかの段階があるため、どの段階の木材を売買するかによって、価格が変わってくるのです。実際の取引では、立木^{りゅうぼく}価格、丸太価格、製材価格を使い分けて取引することが多くなります。下の図5は、木が木材になるまでの売買の流れの例です。

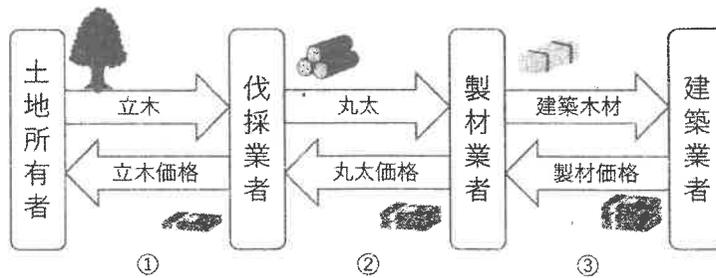


図5 木材の売買の流れ

- ①土地所有者は、立木(生えている木)を伐採業者に立木価格で売ります。
- ②伐採業者は、木を伐採して丸太に加工し、製材業者に丸太価格で売ります。
- ③製材業者は、丸太を買い取って柱や板に使うことができるように加工し、建築業者などに製材価格で売ります。

丸太価格は立木価格に伐採の費用などを上乗せした金額になります。日本の場合、アメリカ合衆国やカナダなどと比べて立木価格と丸太価格の差が大きい傾向にあります。それはなぜでしょうか。日本の地形を考えて説明しなさい。

問10 下線部ケについて。高度経済成長の時代に住宅の建設が増えたのはなぜでしょうか。その理由を2つ説明しなさい。

問11 下線部コについて。下の図6は東南アジアにあるインドネシアの主な木材製品の輸出量の移り変わりを示したグラフです。グラフから読みとれる変化の背景には、インドネシア政府が森林保護のために丸太の輸出を禁止したことがあります。このときインドネシア政府は、林業を全面的に禁止したわけではなく、合板*1やパルプ*2の製造や輸出をすすめ、それらの原材料生産のための林業は認めました。インドネシア政府はどのような目的で輸出品を切り替えたと考えられますか。説明しなさい。

- *1…何枚かの薄^{うす}い板を重ねて貼^はり合^あわせたもの。ベニヤ板。
- *2…木をほぐした^{せんい}繊維で、紙の原料などになるもの。

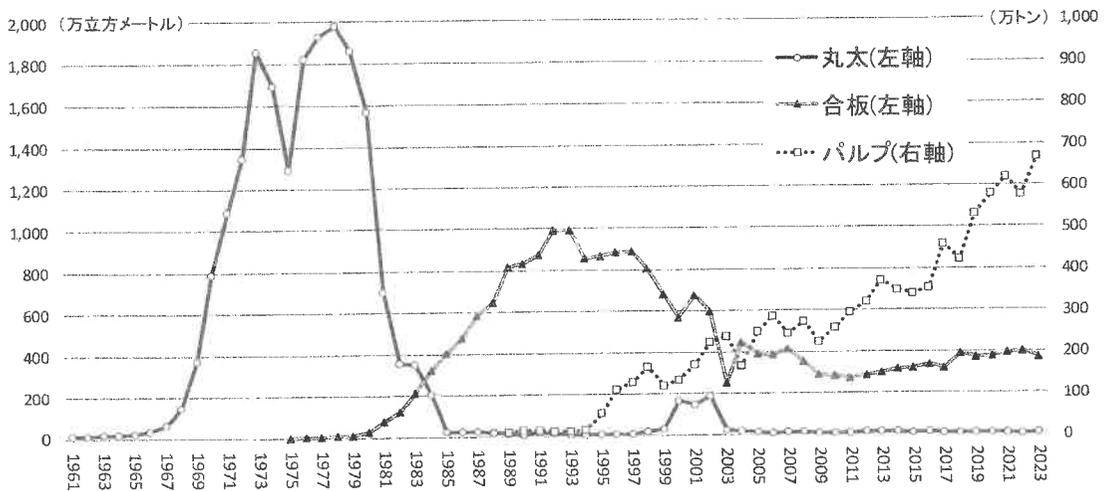


図6 インドネシアの主な木材製品の輸出量の移り変わり
(FAO国連食糧農業機関のデータより作成)

問12 下線部サについて。木材をチップにして燃料に使う取り組みは、森林の生育にも良い影響があります。それは何でしょうか。説明しなさい。

問13 下線部シについて。私たちは、本文でふれられていること以外にもさまざまな森林の問題に直面しています。そこには利用と保護のバランスをめぐるさまざまな対立があります。このような対立の具体例をあげ、土地を利用したい人が求めるものと、森林を保護したい人が心配していることの両方がわかるように、80~120字で説明しなさい。ただし、句読点も1字分とします。

〈問題はここで終わりです〉

受験番号	
氏名	

(2026年度)

社会解答用紙 (その1)

問1

あ	<input type="text"/>	い	<input type="text"/>
う	<input type="text"/>	え	<input type="text"/>

問2

①	<input type="text"/>	②	<input type="text"/>
---	----------------------	---	----------------------

問3

問4

(1)

(2)

問5

	場所	説明	場所	説明
(1)	石見	<input type="text"/>	熊野	<input type="text"/>
(2)	<input type="text"/>			

問6

<input type="text"/>
<input type="text"/>

問7

①

②

(整理番号)

小計

小計
<input type="text"/>

